

# 幼児教育志望学生に特化したピアノ指導法

－初心者の育成と継続的指導への探求－

木原英子

Piano Pedagogy for Early Childhood Education Majors  
:A Quest for Teaching Beginners and Continuing Training

Hideko Kihara

---

こども学専攻必修科目であるピアノ基礎技法（科目名：音楽Ⅱ）は、プレースメントテストにより習熟度別クラス編成を行い、複数学生が共に実技の上達を目指すグループレッスンである。

本稿は主に初心者クラスを担当する筆者が、限られた期間での技能上達及び保育現場における「使えるピアノ弾き」育成のために行った指導法への探求と創意工夫とを、言語とデータにより記したものである。

**Key Words:** [グループレッスン] [ピアノ初心者] [うたとあそび] [幼稚園実習]

(Received September 11, 2017)

## はじめに

鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻では、専門教育科目として5つの音楽科目を設定している。そのなかで音楽Ⅱは「ピアノ基礎技法」として必修科目となっている。入学直後プレースメントテストにより習熟度別のクラス編成を行い、授業はクラス毎のグループレッスンにより進められる。

筆者は平成25年度より初心者のグループを担当し、平成28年度現在4年目を迎えた。ピアノ演奏は幼児教育者にとって不可欠な技能だが、そのスキルを短期大学入学時に全く持たないか、ゼロレベルとは言えないまでも初歩的な段階にある学生を4年に亘って連続して指導してきたことになる。科目としての音楽Ⅱは2単位であり、通年全30コマ（1コマ=90分）と設定されている。こども学専攻開設以来、必修科目としては1年次だけの履修が義務づけられてきた。幸い平成28年度から2年次も音楽Ⅳとして、15コマの履修が可能になった。これによるピアノ上達への影響は現時点ではデータが十分ではないが、数年後には成果が報告できるものと期待し

---

\* 鹿児島純心女子短期大学非常勤講師

ている。

## I. 初心者指導の実践 (平成25～28年度)

### 1. 「初心者」の定義とピアノ技能の実情

まず本稿における「初心者」という言葉の定義を示しておきたい。

〈その1〉プレースメントテスト時「ピアノ経験有無 1ある 2ない」という設問で「2」を選択した者。

〈その2〉上記設問で「1」を選択し、「経験年数」の項目に1年あるいはそれに近い数字を記入した者。

〈その3〉平成27年から実施された「入学前ピアノ講座」を受講した者。<sup>\*1</sup>

グループレッスンでは教室内に複数設置された電子ピアノを使用するが、平成26年度からは最大9人となっている。次にこの4年間初心者が全体に占めた割合について述べたい。

### 2. 増加を続ける初心者

こども学専攻が開設された平成14年度、入学者37名中初心者は6名であった。割合でいうと約16%である。筆者が指導を始めたのは平成25年度だが、ほぼ10年の間に初心者がどの位増加し推移したかを表と図で示した(表1及び図1)。

平成14年度こども学専攻開設時には16%だった割合が、約10年後の平成25年度には20%にまで増加している。だが16名という人数は多いように見えるが、定員増に伴い入学者そのものが増加したことを考慮すれば、さほど劇的な増加とは言えない。むしろ翌年の平成26年度にわずか1年で割合として2倍の増加があったことに驚かされる。

続く平成27年度は前年度とほぼ同じ割合を示している。

平成28年度にはやや減少しているとはいえ、開設時よりは高い割合を示している。平成28年度には30%と、やや減少している。

表1 初心者数及び割合の推移

年度	全体数 (人)	初心者 (人)	割合 (%)
14	31	6	16
25	81	16	20
26	53	21	40
27	58	24	41
28	70	21	30

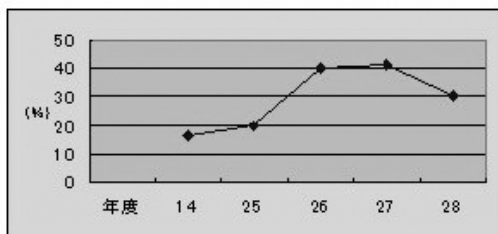


図1 初心者割合の推移

要因の一つに、未経験者だった高校生がこども学専攻入学決定後に個人レッスンを受け始める、というケースが増加したことが挙げられる。そのことはプレースメントテスト時に記入する履歴申告に、何件かその旨を記す記述が見られることから知り得た傾向である。わずかな期間でも入学前にピアノを学んでおくと、初心者クラスに配属されても授業を効率よく進めることができる。幼児教育を志す高校生に向けて今後推奨していくべきと考える。しかしながら3年連続して20名を超える初心者が入学してきたことは、この先も大幅な変動は見込めない傾向として受け止めるべきであろう。

初心者の入学増加は、筆者の知識の及ぶ限りではあるが、近年保育者養成校における共通の傾向であると言える。九州公私立大学音楽学会では、年1度の大会において「ピアノ初心者への効果的な指導法の研究」や「ピアノが苦手な保育者が音楽を通して幼児と関わる方法」などの研究テーマを中心に討議が行われたり、フォーラムのテーマとして掲げられたりすることが多い。指導に携わる教官の多くが初心者教育に関心を寄せていることを窺わせる。

近年養成校入学者の中に初心者が増加していることの要因はいくつか考えられる。一つは少子化の影響である。本学ではこども学専攻開設当初より、入試科目にピアノ実技は含まれていなかった。しかし入学者選抜においてピアノ技能を重視してきたいくつかの歴史ある大学でさえ、18歳人口減少に伴う学生獲得の方策として入試科目からピアノ実技を省くという決断をしたと耳にする。かつて保育者養成校では入学試験に『バイエル100番』や『ブルグミュラー 25番』等、比較的難易度の高い楽曲の演奏を要求していた。つまり幼児教育者を目指す者は少なくとも高校卒業までに、ピアノを購入したり個人レッスンを受けたりすることが、常識と考えられていたのである。

もう一つは推測の域を出ないが、数年続いた景気の低迷も少なからず影響しているのではないだろうか。鹿児島（旧薩摩藩）には古来子女の教育に熱心な精神的風土がある。たしなみとして師弟にピアノを習わせる家庭が多い時期があったと音楽関係者から聞いている\*2。だが国家予算レベルにおいても、財政が逼迫すると真っ先に削減されるのは経済活動に必要な不可欠とは考えられない部門である。好景気時代には盛んに行われたであろうこと、例えば楽器を購入したり高額な個人レッスンの謝礼を払い続けたりすることが、不景気時代の現在においては裕福な家庭の子女に限定されてくるという傾向は、避けがたい流れとも考えられる。

「私はこどものころピアノが習いたかった。でもお金がかかるといって親が許してくれなかった」「自分にピアノが弾けるようになるとは思わなかった」「純心短大に入学したおかげで、授業でピアノを習うことができる。今とても幸せです」

以上は数名の学生がレポート\*3に書き記した感想を抜粋し要約したものである。彼らには家庭の事情で入学前にピアノを学ぶことができなかったという共通点がある。養成校の入試科目にピアノ実技はあるほうが良いのではないか、これは筆者の変わらない持論である。しかし上記のような学生達の意見を受け止めることにより、意識の変革が起こりつつある。初心者増加を嘆いてばかりでは何の解決にもならない。かつてピアノ経験の有無によってとりこぼしていたであろう幅広い人材を獲得できたことをむしろ喜び、潜在能力を開花させるべく指導に一層の力を注いでいくのが、今の自分に求められていることだと気づかされたのである。

### 3. 音楽Ⅱの特色

#### ①少人数クラス授業

本学では音楽Ⅱ（ピアノ基礎技法）をグループレッスンで行う。年度によりピアノ教室の収容人数に違いはあったが、現在は最大9名の少人数制である。教室には電子ピアノが設置されており、1人1台が割り当てられている。但し専用設備を使用するピアノ・ラボとは異なり、あくまで「グループレッスン」であるところに特色がある。

入学者はプレースメントテストを受けて、能力別に所属クラスが決められる。筆者の担当は

「経験ゼロ」と申告した学生、または幼少期から高校卒業までの間ごくわずかな経験を有した学生のグループである。平成26年度以降担当クラスが4つになり、従来の初心者3クラスに加え、1つは“経験者グループ(2～3年のレッスン歴)”となった。本項では初心者指導について述べるため、教材と指導法が初心者とは異なる経験者クラスについてはあてはまらないところもある。

## ②グループレッスンの利点

グループレッスンの良いところは「孤独じゃない」という点であろう。初心者にとってピアノという楽器は「難しい」ゆえに「こわい」イメージを与えがちである。「自分に弾けるだろうか」という不安を抱える者が殆どである。仲間と不安を共有し「共に頑張ろう」という励ましを受け取ることができるのが、グループレッスンの最大の利点である。90分の授業中1人1台が割り当てられていることを最大限に活かすことを心がけるべきである。次に具体的な実践について触れたいと思う。

### A. 全員で一緒に弾く

まず全員で同じ曲を弾くことを目指す。左右片手ずつ弾く、ワンフレーズずつ弾く、歌いながら右手(左手)だけ弾く、最後に両手で合わせてみる。1曲の譜読みを終えるまでに楽曲をいくつかのセグメントに分け、全員で遅めのテンポで弾く。「間違っても目立たない」ということが自信のない学生に「だからとにかく弾いてみよう」という気持ちを起こさせるのである。グループとして上達していくのを実感する一方、「自分だけ弾けていないのでは」という焦りを感じることもある。それを解消するのが個別指導である。

### B. 一人で弾く

譜読みが完了したら、ヘッドフォンを装着し個別練習に入る。最長5分という時間を予め言い渡すのが肝要で、その間自分の音を聞き何が出来て何が出来ないかを見極める。電子ピアノは通路を挟んで配置されており、教師は見回りながら1人ずつ進捗状況を確認することができる。各自練習に没頭する他の学生に気兼ねせずに、質問したり指導を受けたりすることが可能になるのである。

### C. 発表する

ソロ演奏を発表する機会を頻繁に持てるのも、グループレッスンの利点である。慣れるまでは1曲の1段ずつを演奏させる。全曲通しての演奏は緊張を強いるが、小さなフレーズ每ではそれほどの負担にならず、成功すれば達成感もあり、徐々に「人が聴いていても弾ける」ための度胸を身につけていくのに役立つ。学期の冒頭に授業計画表を配布し、楽曲毎のテスト日を予め告知しておく。これを「小テスト」と位置づけ、1曲につき2～3週間の準備期間を設ける。「小テスト」は採点上重要な素材ではあるが、計画的に楽曲を演奏レベルに仕上げる訓練と、定期的にクラスメートの前で緊張感を持って演奏する経験を持つことを主目的としている。個人の演奏の間それ以外の学生は聴くことに集中する。他人の演奏を聴くことから多くを学ぶことができるからであり、批評するためではなく温かい目で見守る級友の存在は、グループレッスンだからこそ持ちうる利点であると言えよう。

また殆どの学生が1年次の後期に幼稚園実習を控えており、園児やスタッフを前にしてピア

ノを弾くという経験をする\*4。授業での発表を繰り返すことの中には練習の目標を明確にすると共に、実習での演奏を想定しながら準備を進めるという要素が盛り込まれているのである。

#### D. オプション

学生が教師役となり級友を指導する“模擬指導”を体験させることも、グループレッスンでは可能となる。1人ずつ前に立ち前回の授業の復習を指揮することは、その具体例である。テンポの決め方、アインザッツ（合奏の出だし）のとり方、声かけの仕方（うまくいけば褒める・問題点は指摘し改善する）等を学ぶのにも役立つ。教育者を目指す学生にとって複数の人を前にして「理解してもらえよう話す」訓練は重要であり、ピアノ授業でそれを体験できるのも、グループレッソンの利点であると言える。

### ③技術向上を支える3本の柱

グループレッソンの利点を活かし、年間30という限られたコマ数で効率良く上達を目指すためには、どのような授業プランがなされるべきだろうか。初心者を中心して指導したこの4年の間に様々な試みをしてきたが、柱とも言うべき要素を以下の3点に絞って述べてみたい。

#### A. テクニック教材

初心者に適切な教材を選ぶことはピアノ指導において非常に重要である。ピアノ演奏は左右5本の指を全て使うので、1本ずつ指の運動能力を鍛えることから始めなくてはならないからである。

音楽は芸術の一分野ではあるが、この点において楽器演奏はスポーツに近い。アスリートが柔軟運動やウエイトトレーニング等を欠かさないように、ピアノを弾くための筋力や反射神経を日々の練習によって発達させ、持続させる必要がある。テクニック教材はピアノ奏者にとっていわばトレーニングジムのようなものと言えよう。初心者に威圧感を与えない平易さを持ちながら、ピアノ奏法のあらゆる要素をくまなく学習できるものが望ましい。その観点から『バーナムピアノテクニック導入書\*5』を選び、4年に亘って使用している。1曲が8小節前後と短いため、反復練習がさほど苦にならない。12曲ずつグループになっており、1グループをマスターしたら次に進む仕組みになっている。初心者クラスでは『バーナム』の課題曲を練習前に必ず弾くことを、ガイドラインに載せている。忙しく練習時間を確保するのが困難でも1日5分は弾くことを推奨しているが、それはテクニック訓練の積み重ねが上達に欠かせないからである。テクニック教則本を省略して楽曲に挑んでも、思うように弾けずピアノ学習そのものが挫折してしまう。初心者だからこそその点を強調しておくべきであろう。

#### B. 赤本への取り組み

赤本は正式名を『うたとあそび』というのだが、書籍名として語感の印象が薄いので、通常「赤本」と呼んでいる。装丁が印象的な赤一色だからである。赤本には季節の歌が4月から3月まで月ごとに順番に収録されており、巻末には生活指導の歌と集団あそびの歌が数多く載せられている。

「幼児教育において音楽教育の占める位置と役割はきわめて大きく、幼児時代こそ音楽を正しく把握し、よりよく伸展させ、豊かな人格形成に資することは、我々教育者の使命の一つでありましょう。そのためには、良い教材が必要となってきます\*6」

以上は序文からの引用である。発行元は鹿児島県私立幼稚園協会で、県内の関係者にはよく知られた曲集である。鹿児島県内の幼稚園・保育園出身者で、教室内のピアノ譜面台に置かれた赤本を記憶している人は多いのではないだろうか。教員採用候補者試験<sup>\*7</sup>のピアノ実技試験課題曲は、例年赤本から出題される。また幼稚園実習と保育園実習の際、実習園から赤本の収録曲を実習時期にあわせて予習するように、との課題が出されることが多い。

以上に述べたことから、赤本は鹿児島の地にあつて幼児教育に携わる者が避けて通れない重要な曲集であることがわかる。但しその実体は初心者グループにとっては高嶺の花、つまり作曲者自身によるオリジナル楽譜で構成された曲集である。湯山昭氏、中田喜直氏、越部信義氏といった、日本音楽史に輝かしい足跡を残す作曲家達による楽曲の伴奏部は、どれも格調高く音楽的に豊かである。大作曲家のオリジナルを華麗に弾くことは理想的であるし、さぞ幼児期に人格形成に好影響を与えることと思う。

しかしピアノを始めたばかりの学生には手の届かない難易度の高さである。それらの楽譜を一読しただけで圧倒され落胆してしまう初心者を勇気付け、入学後7ヶ月後には直面する実習に備えるために、これまで様々な工夫をこらしてきた。

一つは赤本収録曲の簡素化である。まず学生からの聞き取り調査をもとに実習園からのリクエストが多い曲を分析する。そして季節の歌と生活指導の歌の中から、実習期間中弾く可能性が高い曲を抽出し、平易に書き直したのである。調性は可能な限り調号のないハ長調に移調し、右手で歌のメロディー、左手でブロックコード（固まりの和音）を使って弾けるように心がけた。幼児の歌は調性が長調のものが大半を占め、和声はC（ドミソ）・G7（シファソ）・F（ドファラ）の3つのコードでまかなえるものが多い。

簡易楽譜を弾きこなすための準備は、常に怠らないよう指導している。中でもポジション（5本指の置き場所）の概念を、早い段階で徹底的にたたき込むことは重要である。“A. テクニック”の項で触れた『バーナム』を始め、アメリカで生まれた教材にはポジション・システムを採用しているものが多い。初心者が鍵盤楽器であるピアノを学ぶためにポジションを把握しておくことで、楽曲を弾く際それを応用することが可能になってくる。

### C. 楽曲への取り組み

音楽Ⅱは幼児教育での実践的な技能習得に特化したピアノ授業である。だが純粋なピアノ作品への挑戦をも、全員に課している。前述の「教員採用候補者試験」におけるピアノ実技試験では、課題曲の弾き歌いの他に自由曲の演奏も義務づけられているからである。

受験者への留意事項には次のように記されている。「ピアノ曲を選んでください。バイエル・ソナチネ・ソナタその他クラシック等の中から、自由に1曲選定のこと。<sup>\*8</sup>」ここで気をつけるべきは「クラシック等」という表現であろう。つまり「自由に」とは言いながらもポップスやジャズ、アニメのBGM等よりは、クラシック音楽が望ましいという出題者の意図が読み取れる。試験は例年8月に実施され、学生は2年次の夏期休業中に受験することになるため、できるだけ早く選曲をすませ、前期の後半（6～7月）には試験に向けて仕上げていくという作業が必要なのである。

2年次の8月に照準をあわせ、試験曲として相応しい楽曲を弾けるようにするためには、入学直後から計画を立てて取り組む必要がある。そのことを痛感したのは、非常勤講師として初心

者クラスを指導し終えた平成25年度の終わりであった。その時点で2年次でのピアノ授業は必修ではなかった。つまり担当した学生全てを8月の試験まで指導することは出来なかったのである。自由曲への対策をたて実践したのは、翌平成26年度入学の学生達からであった。

テキストとして選んだのは『ピアノ小曲集 バイエル併用【1】(小川一朗 編 シンコーミュージックエンタテイメント)』である。テクニック教材に使用した『バーナム』同様、ポジションシステムを採用しており、各曲のタイトルに「バイエル〇〇番程度」と記されているため、難易度がわかりやすい。一冊でバイエル10番程度から100番程度の曲までと、幅広い難易度の曲が収録されているのも便利である。

編者の小川一朗氏が、まえがきの中で述べていることに非常に感銘を受けた。「元来音楽は、何かの感じを想いうたい、心情を美化して、しかも常に心たのしくあってこそ、その値打ちがあるものと思います(中略)初心者に対して、技術の錬磨と同時に、音楽的表現の種々相を理解させ、且つはその演奏効果を上げさせるよう色々な楽曲を与えることは、寸刻もゆるがせに出来ないものと思います\*9」

前期と後期でそれぞれ4～5曲をマスターすることを目標とし、少しずつ曲の難易度を高くして最終的には試験曲として受容しうるものに挑戦することがゴールと考えている。

次に平成27年度に指導した学生が習得した楽曲を例として挙げる(表2参照)。

表2 初心者クラスの「ピアノ小曲集」課題一覧

前期(4月～7月)		後期(9月～1月)	
曲名	難易度	曲名	難易度
7 ブンブン小蜂	バイエル10番程度	19 かっこう	バイエル30番程度
12 メリーのかわいい羊	バイエル20番程度	28 泉のほとり	バイエル50番程度
16 よろこびの歌	バイエル30番程度	26 そよ風	バイエル50番程度
9 水車	バイエル20番程度	37 チクタク時計	バイエル70番程度
14 おどり	バイエル20番程度		

「チクタク時計」は『ツェルニー教則本』シリーズで名高い作曲家ツェルニーが作曲した作品で、テクニカルな内容を持つ。左手に“アルベルティー・バス\*10”という伴奏形が用いられており、右手とあわせるのが非常に難しく、初心者には難易度が高いと言える。全員がこれを弾きこなせるようになったことは、初心者指導の目標到達度を測るのの一つの目安として評価することができよう。平成28年度に音楽Ⅳ(ピアノ実践法)が資格取得希望者の必修科目と定められ、1年次に指導した学生ほぼ全員が2年次も継続して授業を受けられることになった。このことにより、8月の試験に向けて課題曲と自由曲をそれまで以上にきめ細かく指導することが可能となった。

次に表2の楽曲を学んだ学生グループが2年に進級し、平成28年度の教員採用候補者試験において自由曲として選んだ楽曲の一覧を表3にまとめた。

表3 平成28年度教員採用候補者試験ピアノ実技自由曲一覧

曲名	難易度	作曲者	弾いた人数
春の声	バイエル20番程度	ハリオット	4
泉のほとり	バイエル50番程度	エーステン	1
故郷の人々	バイエル70番程度	フォスター	1
チクタク時計	バイエル70番程度	ツェルニー	1
すみれ	バイエル90番程度	ストーリーボグ	4
春の訪れ	バイエル100番程度	グルリット	1
アラバスク	バイエル100番程度	ブルグミュラー	7
トルコ行進曲	バイエル修了程度	ベートーヴェン	2
エリーゼの為に	『ピアノ小曲集』以外から選曲	ベートーヴェン	1

この学年は1年次の前期終了までに上達度にはばらつきが見られたため、後期にクラス編成をしておいた初のケースであった。スタートラインでは同じ初心者だったのだが、入学後1年半で技術面において大きく

差がついたことがこの表から見て取れる。特に「すみれ」「春の訪れ」「アラバスク」「トルコ行進曲」を自由曲に選んだ学生は、短期大学入学後にピアノを始めたとは信じられないほどの上達を見せたのである。

これまでに述べたように、楽曲への取り組みは教員採用候補者試験対策として必要不可欠であり、今後も選曲及び指導法を研究する余地があることは明白である。

また幼児の歌だけでなく純粋なピアノ曲に挑戦することは、初心者にとって励みになるものであり、上達を実感し喜びを感じることでできるものであることを付け加えたい。

④木原クラスを支える3本の柱

本項では初心者だけでなく、経験者を含めたクラス全てに適用する運営法について述べてみたい。担当クラスを一括して本文では筆者の名を借りて「木原クラス」と名付けることにする。まずこれまで4年に亘り指導した学生のレベルの内訳を表4に明らかにした。平成26年度以降クラス編成の仕方が変わり、1クラスの人数が減り反対にクラス数が増えた。それに伴い筆者は初心者に加え、経験者を1クラスないし2クラス指導することになった。初心者と経験者で

表4 音楽Ⅱ・木原クラス受講者のレベル内訳

年度	クラス数	人数	レベル
平成25	1	16	初心者
平成26	4	A 6	初心者
		B 7	初心者
		C 8	経験者(1~2年)
		D 8	経験者(3年程度)
平成27	4	A 7	初心者
		B 8	初心者
		C 9	初心者
		D 8	経験者(1~2年)
平成28	4	A 7	初心者
		B 7	初心者
		C 7	初心者
		D 9	経験者(1~2年)

は使用テキストと課題曲に違いがあるのは当然であるが、以下に述べることはレベルに関係なく全クラスで実践していることを予めことわっておきたい。

A. 小テスト

小テストに関しては別の項ですでに述べている。授業で取り組む曲の殆どに期限を設けてテストを行い、演奏の出来映えをA+からDまでの8段階で評価するものである。アルファベットは各クラスの達成度に応じて数値化され、年度の終わりに評価をつける際の重要な資料となっている。



## B. 弾き歌い

もう一つは弾き歌いに積極的に取り組ませる、ということである。幼児教育の現場に必要なのは、第一に幼児の歌唱を助けるためのピアノ演奏である。教育現場で月毎の季節の歌、行事関連の歌、朝のお集まりや帰りの会で歌われる歌曲を、リズムの側面から助け且つ楽しく歌わせるためのピアノ演奏が求められるのである。

「歌って弾ける人が欲しいのです。バイエルがどんなに上手に弾ける人でも、弾きながら歌えなければ意味がありません」

これまでにいくつかの幼稚園や保育園に調査に行ったが、宮崎県西都市の或る保育園で「現場で求められている音楽スキルとは何か」という園長への質問に対して得た答えがこれである。その保育園の保育士の一人は音楽大学を卒業した専門家だが、立った姿勢のままピアノを弾きながら、子ども達に声をかけ続けていた姿に目を見張った。その間鍵盤と楽譜は一顧だにしていなかったのである。

弾き歌いは容易ではない。ピアノ歴が長くクラシック音楽の大作曲家の作品を弾きこなすレベルの学生<sup>\*11</sup>にとっても、「手と口を同時に動かす」ことは至難の業である。むしろ純粋にピアノ技能を追求してきた学生の方が、弾き歌いに違和感を抱くことさえある。

「ピアノだけだとうまく弾けるのに、一緒に歌うと手が止まってしまう」とは、過去に上級者からたびたび聞かれた意見であった。

ならばピアノを始めたばかりの真っさらな状態で「手と口は同時に動かすもの」と刷り込みを行ったほうが、上級者が感じる類の抵抗を感じずにすむのではないだろうか。その気づきが発想の転換をもたらした。現在使用している簡易楽譜は、初心者が自然な形で弾き歌いをするように配慮がなされている。別項で述べた“グループレッソンのメソッド”には、弾き歌いを効率よく盛り込むように心がけている。その甲斐あってか、前期終了時（ピアノを始めて4ヶ月経過）には技量に個人差があっても、ほぼ全員が弾きながら歌えるようになっている。

## C. 練習記録シート

3つ目の柱は練習記録シートである。毎週授業で全員に配付し、1週間記入し翌週の授業で提出するよう義務づけている。記入内容は①練習した日付②練習時間（長さ）③内容（楽曲のタイトル・練習方法等）、そして自由記述の「質問・感想」である。記入の目的は第一に練習の習慣をつけることである。経験者クラスの学生は幼少時から高校卒業までの間にピアノレッスンを受けていたので、楽器の習得に「日々の練習は不可欠」であることを知っている。しかし未経験者の多くは、週1回授業を受けさえすればピアノは習得できるものと考えがちである。大切なのは寧ろ授業と翌週の授業の間、その一週間を如何に過ごすかということである。そのことをスタートラインに立った時点で理解させ、早急に練習を生活の中に組み込む努力を促すことが必要なのである。

提出されたシートは丁寧に目を通し、練習時間や頻度を特に重視しチェックする。

赤ペンでコメントを細かく書き込み、練習時間が足りない学生にはもう少しふやすように、十分練習していれば褒め言葉や励ましの言葉を書き込むようにしている。

各人に個性がありライフスタイルも多様である。練習の取り組み方にも個人差がある。極端な例としては、1回5分の練習でも1日も欠かさない者もあれば、週末長時間集中型もいる（1

～2時間)。授業中の取り組み方と小テストでの出来映えとを照らし合わせて、各個人に最適と思われる練習法をアドバイスするように心がけている。また自由記述欄には、教師への質問や感想を積極的に記入するように促している。例えば「○○(曲名)の3段目がどうしても弾けません」「アルベルティー・バスだと難しいのでブロックコードで代用したい」といった技術面での質問には、具体的に対処法を文章で示すことができる。中には「授業の進み方が早すぎる」「説明の後に挙手質問できる時間が欲しい」等といった要望や指摘もあり、それらが授業内容や進度を見直す貴重な判断材料となることもある。非常勤講師は常勤と違い、授業以外の時間学生と接することができない。練習記録シートは書面でのコミュニケーションとして機能し、各個人と指導者をつなぐライフラインとなり、信頼関係を構築する役割をも果たしている。

楽器を、ひいては音楽を学ぶためには、指導者を信頼することが不可欠である。グループレッスンの利点については別項で述べたが、不利な点を挙げるとすれば個々の学生とじっくり接する時間がない、ということであろう。それを補うのに有効な手段として、練習記録シートを今後も活用していきたい。

#### 4. 新たな試みと変化

冒頭で述べたように、筆者が本学で初心者指導を始めて4年が経過した。その間いくつか新しい試みやそれらがもたらす変化が見られた。変化の要因としては、幼児教育の場におけるピアノ技能の重要性が再認識されつつある、という現状が大きく影響している。本項ではそれらのうち2つを例として挙げることにする。

##### ①入学前ピアノレッスン特別講座

入学前ピアノレッスン特別講座(通称プレレッスン:以下通称)は、平成27年3月に初めて開催された。第1回目には合計16名の受講申し込みがあった。本学の専任教員と、筆者との2人によって、1クラス4名を2クラスずつ指導し、1回90分の講座を2日に亘り2コマ開講した。対象者はこども学専攻に入学が許可された者で、ピアノレッスンを受けたことのない未経験者に限られた。

##### 【内容】

##### 第1日目

- ・自己紹介
- ・指番号の導入(左右5本の指につけられた1～5の番号・世界共通)
- ・ド音探し(2と3の指でチョコキを作る→2つ並び黒鍵を押さえる)
- ・ポジションの導入(右手のミドルCポジション:1を中央下に置く)
- ・コードの導入(左手のCポジション→C・G7を押さえる練習)
- ・応用「ちょうちょう」リズム打ち(四分音符・二分音符・全音符)→階名読み→右手パートを弾く→左手パートを弾く(C・G7を押さえてカウントする)→左手で弾きながら右手のメロディーを歌う→両手で弾く

第2日目

- ・前日の内容確認
- ・「ちょうちょう復習」
- ・「メリーさんのひつじ」リズム打ち（八分音符・付点リズム追加）以外は前日と同じ
- ・アンケート記入

第2日目終了後、受講者全員にアンケート記入を依頼した。6つある項目のうち「講座の内容について」は受講者からのフィードバックとして特に重要であった。講座の難易度を5段階で評価してもらったものを表5にまとめた。

表5 講座の内容について（選択式及び自由記述式 計16名 回収率100%）

難しかった	やや難しかった	ちょうどよかった	やや簡単だった	簡単だった	記入もれ
0人	3人	4人	5人	3人	1人

「ちょうどよかった」と「やや簡単だった」と回答したのが計9名で、全体の約半数を占めている。わずか180分の指導でピアノ奏法のアルファベットを導入し、終了時までには2曲を弾きながら歌うという段階まで進むことができたのは、指導する側からすると予想以上の成果と言える。一方約半数の受講者から難易度に関し中段階の感想を貰えたということは、内容と進度に大きな支障はなかったという評価である、と受け取ることができた。「やや難しかった」と「簡単だった」に3名ずつが○をつけたことには、受講者のバックグラウンドが関係していると考えられる。例えばピアノは初めてでも、中学か高校で合唱部・吹奏楽部といった音楽系の部活動に所属していたのであれば読譜力は備わっているし知識もある。また幼少期にピアノ経験があったが、やめてからの期間が長く不安を感じていたため受講を決意した、というケースも中にはあったようである。受講者それぞれの事情等は、第1日目の自己紹介や、アンケート項目の1つである「小・中・高校時代に経験したクラブを記入して下さい」への記入によってかなり知ることができた。

続いて自由記述形式の感想からいくつか抜粋し紹介する。

- ・ペースがゆっくりなので焦らずに学ぶことができた。
- ・初心者でドキドキした。教え方がわかりやすかった。
- ・指の動きや形を丁寧に教えてもらった。
- ・左手が追いつかなくて少し焦ってしまった。弾けたときはほっとした。
- ・以前習っていたが忘れたこともある。参加して本当に良かった。
- ・この講座で習ったことを入学するまで復習していきたい。

他の感想もニュアンスの違いこそあれ、参加して良かったという、肯定的なものが殆どであった。

受講者16名は入学後音楽Ⅱのクラス編成時に、8名ずつ2クラスに分けられ、平成27年度筆者が指導することになった。2クラス全員がプレレッスンで基礎を学んでいたため、正規の授業では、過去の初心者クラスよりも一歩先から進めることができた。このことはプレレッスンを企画した時点ではそれほど期待はしていなかったため、想定外の嬉しい成果であった。

プレッスンにはピアノ授業に対する不安以外に、短大生活・友達関係に対する不安をも軽減する効果を一部の参加者にもたらしたことを付け加えておきたい\*<sup>12</sup>

平成28年3月に第2回目の講座が開催され、計19名が受講した。そのうち2名がかなりの実力を有する経験者であったため、入学後音楽Ⅱのクラス編成時には、上級者クラスに配属された。残る17名は入学後に筆者の担当する初心者クラス2グループに配属されたので、継続して指導をすることができた。この年度も第1回目同様かなりの成果を上げられたため、初心者を対象とした入学前講座は今後も継続していくことが望ましいと考えられる。

## ②習熟度別クラス編成

初心者指導を始めて3期目の平成27年度、前期（4月～7月）終了後に初の試みとして、クラスの再編成を行った。担当していた4クラス中3クラス内で、各人の上達度に差がついてしまったことが主な理由であった。残り1クラスはピアノ経験者を集めたグループだったため、解体はせず継続した。

再編成後新しくできたクラスは、以下の3レベルに分かれた。

〈レベル1〉小テストで常にA+かAの評価を維持した。

〈レベル2〉小テストで概ねB+からB-の評価を維持した。

〈レベル3〉小テストで両手弾きが困難であった。評価はCが殆どであった。

音楽Ⅱは通年科目であるため、年度の半ばでクラスを編成しなおすことはかつてなかったことであった。この年初めて再編成に踏み切ったのだが、指導者にとっても大きな決断を要した。スタートラインでほぼ同じ条件を有した受講者が、後期では実力でランク付けされる様相になったからである。そのことから受ける心理的な影響も懸念された。しかしもたらされる利益の方を優先し、実施を決心した。

利点の一例として、各クラスレベルに相応しいプログラムや課題曲、授業の進度を決定できることが挙げられる。〈レベル1〉クラスには経験者クラスと同程度の難度の楽曲を課題として与え、双方の競争心を刺激し発憤するような雰囲気作りをすることができた。反対に〈レベル3〉クラスは熱意と努力の点で他の2クラスに劣っていたので、進度をゆるやかにし個別指導に割く時間を増やし、少しでもレベルの引き上げを行うよう注力した。〈レベル2〉はスタート時初心者であったが、特に優秀ではないが順当な成長を見せるグループ、と位置づけることができた。

カリキュラムが変わったため、この期の学生達を2年次も継続して指導することが叶った。そのプロセスで〈レベル1〉は目覚ましい上達を続け、中には経験者クラスを追い越す者もでてきた。

一方で〈レベル3〉は期待した程の成果をあげることができなかった。指導者の力不足から、受講者のピアノに対する意欲を向上させられなかったことが、原因として考えられる。

再編成を行った時根拠となったのは、主に小テストでの評価であった。しかし前述の「練習の記録シート」提出状況が無関係ではなかったことは、要因の一つとして今後検討するべきであろう。〈レベル1〉全員がほぼ100%の提出に努めていたのに対し、〈レベル3〉では毎回提出する学生は殆どなく、理由を尋ねても「忘れた」と答えることが多かった。

強調したいのは、練習時間と小テストでの評価には密接な関係がある、ということである。〈レベル1〉クラスは毎日、または殆ど毎日十分な時間ピアノに向かっていったことが、記録から明らかであった。練習熱心なのに何故か〈レベル3〉に配属されてしまった、という例は皆無である。実技の習得には、生まれ持った才能や適性も見過ごせない要素ではある。しかし何より必要なのは「上達したい」という意欲なのではないだろうか。日々ピアノに向かう時間の長さや集中、それらは意欲が行動となって表れるものなのである。

## Ⅱ. 幼稚園実習におけるピアノ実技の現状

～アンケート調査から見えてくるもの～

### 1. アンケート調査の趣旨

こども学専攻学生のうち幼稚園教諭二種免許取得を希望する学生には、1年次後期、例年11月に、10日間の幼稚園実習が義務づけられる。平成25年度から28年度の実習経験者を対象にアンケート調査を実施した。

調査時期は実習終了直後で、実習後に配付した記入用紙を1週間後に回収する形で行った。アンケート回収数を表6に記した。

表6 幼稚園実習アンケート回収数

年度（平成）	25	26	27	28
調査対象人数	16	29	30	30
回収数	15	24	29	26
回収率	約94%	約83%	約97%	約87%

### 2. 調査内容

調査内容は以下の4項目である。

- ①実習園訪問で、またはオリエンテーションで練習するように言われた曲
- ②いつ言われたか
- ③弾いた場面
- ④感想

これらのうち①では曲名が一覧表になっており、該当する曲に○をつける方式がとられている。「その他」には表にはない曲の題名を記入することになっている。

②では「（ ）月頃」「実習に入ってから」「その他」のうち、課題が出された時期を答えることになっている。

③は「朝の会」「帰りの会」など幼稚園生活の具体的な活動が一覧表に示され、どの場面で何度弾いたかを数字で記入することになっている。

④は自由記述による回答である。

本項では以上4つの質問のうち、「③弾いた場面」への回答から、まず実習中ピアノを弾いた学生を抽出した。そのうえでピアノを弾く機会を与えてくれた幼稚園がどのような楽曲を課題としたのか、課題曲を出すタイミングはいつなのか、どの場面で何回弾かせてくれたのか、等の点に絞って分析し考察を加えてみたい。

### 3. 分析と考察

まず年度ごとに、実際にピアノを弾いた学生の数を表7に示した。実習園は多岐に亘り、毎年同じ数の学生が決まった園で実習を行うとは限らないので、年度によるデータのばらつきに正確な分析を施すのは難しい。しかしながら最も少なかった平成26年度を除くと、全体の70%以上の幼稚園が実習生にピアノを弾く機会を与えていることが明らかになった。実習中ピアノを弾かない可能性のほうが圧倒的に低い。この事実は音楽Ⅱの授業内容を構成する上で、重要な

表7 実習中ピアノを弾いた学生の人数と割合

年度(平成)	25	26	27	28
全体数(人)	15	24	29	26
弾いた学生の数(人)	13	15	22	19
割合(%)	約87	約62	約76	約73

なファクターとして捉えている。続いて実際にピアノを弾いた学生が実習園から貰った課題曲について見てみたい。

#### 【課題曲の傾向】

表8 課題曲 A 11月のうた(赤本に収録されているもの)

曲名	25年度	26年度	27年度	28年度
菊の花	4	6	5	6
線路はつづくよどこまでも	3	10	5	7
山のワルツ	2	3	1	2
ぶらんこ	1	3	1	2
走れちょうとつきゅう	1	4	1	2
ゆうらんバス	1	3	1	2
バスごっこ	1	7	5	3
犬のおまわりさん	4	9	6	6
りんごとみかん	1	4	1	2
もみじ	3	6	2	2
まっかな秋	1	5	5	3

まず課題曲を、A. 11月のうた・B. 生活指導のうた、というカテゴリ別に表8と表9に分けて示した。数字は各楽曲を課題とした実習園の数を表す。

高い数値を示している「線路はつづくよどこまでも」と「犬のおまわりさん」「バスごっこ」の3曲はこどもに人気の高い曲であり、授業でも課題として重視していくべきであると認識した。それ以外

表9 課題曲 B 生活指導のうた

曲名	25年度	26年度	27年度	28年度
おはようのうた (170頁)	1	2	1	3
おはようのうた (171頁)	5	2	5	5
お弁当	6	7	10	1
おかえりのうた	0	3	6	4
さようならのうた	8	5	9	3

でも「菊の花」や「まっかな秋」といった歴史のある唱歌が、保育現場で大切に歌われていることも見て取れる。これらの点にも注意を払うべきであろう。

赤本には全部で15曲の生活指導の歌が収録されているが、実際に弾いたとして回答があったのは、表9に掲げた5曲のみであった。仏教やキリスト教など宗教関係の幼稚園では、園独自の生活指導の歌を採用しているため、その方面で実習を行う学生が多い年度では、表9に表れる数値は低くなる。但し「お弁当」や「さようならのうた」は、鹿児島県では依然として需要があり、将来を見据えて授業で取り組んでおく必要があると考えられる。

赤本には全部で15曲の生活指導の歌

次に示すのは、一覧表に曲名はないが「その他」の欄に記入された楽曲のタイトルである。赤本に収録されているものには月を、それ以外にはカテゴリを参考までに記す。

- ・園独自の歌(カトリック系)・礼拝の歌(プロテスタント系)・礼拝の歌(仏教系)
- ・季節の歌(10・11月)・チューリップ(4月)・せんせいとおともだち(4月)
- ・とんでったバナナ(7・8月)・森のくまさん(10月)・キリンさん(10月)

- ・どんぐり (10月)・どんぐりころころ (10月)・まつぼっくり (10月)
- ・大きな栗 (集団あそびの歌)・いがぐりぼうや (秋の歌)・こぎつね (秋の歌)
- ・でぶいもちゃんちびいもちゃん (秋の歌)・やきいもグーチーパー (秋の歌)
- ・ドラエもん (アニメ)・アンパンマン (アニメ)・ホ!ホ!ホ! (NHK番組)
- ・世界中のこどもたちが (新しい歌)・メリーの羊 (外国の歌)
- ・おどろう楽しいポーレチケ (外国のうた)

実習園によっては具体的な曲名ではなく、「赤本の10・11月の歌を全体的に弾いてきて下さい」という課題の出し方をするところもある。その場合、学生は沢山ある曲のどれから手をつけてよいかわからず困惑するのだが、実習経験者がアンケートに記入してくれた課題曲名は、アドバイスをする時に非常に役立っている。

目立ったのは、実習が11月であるのにも拘わらず、10月の歌が意外と歌われていることである。幼稚園の多くで、「秋さがし」と称して野山や公園で木の実や落ち葉などを採取する活動が行われることが関係していると考えられる。木の実に関する歌が名を連ねることからも、幼児期から四季の変化や自然の豊かさを大切にしている土地柄が偲ばれる。

#### 【課題が出される時期】

「課題が出される」とは、実習園から「○○を練習して下さい」或いは「実習中○○を弾いて貰います」という指示を受けることを指す。学生の回答を表10に示した。

「時期」列の月名は、実習前に行われるオリエンテーションの時期、つまり課題とはオリエンテーションの場で言い渡されることが慣例となっている。特に多い月を点線で囲ったが、夏季休業中の8月、次いで9月に集中しているのはそのためである。

表10 実習園から課題曲が出された時期 (複数回答可)

時期	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
5月	0	1	0	2
7月	0	1	2	1
8月	8	8	14	10
9月	3	4	5	3
10月	2	1	7	1
11月	0	1	0	1
実習中	2	1	2	2
その他	2	2	4	0

「その他」にはオリエンテーションの直前、といった変則的なケースが含まれている。「実習中」とは文字通り実習が始まってから課題が出された場合を指す。オリエンテーション時には「弾かなくて良い」と言われていたのに、何の前触れもなく突然弾くように言われた学生もいた。このようなケースは貴重な経験談として音楽Ⅱの授業

にも活かされている。つまり万一の場合に備えて心の準備はしておいたほうが良い、ということである。

#### 【弾いた場面】

表11 弾いた場面 (活動)

弾いた場面 (活動)	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
朝の会	11	11	15	15
昼食時	6	7	16	8
帰りの会	11	12	18	14

どの場面・活動時に弾いたかという設問には、選択肢として10の項目がある。そのうち5人以上が「弾いた」と答えた3つの項目のみを表11に示した。「朝の会」と「帰りの会」で弾いたのは、部分保育の一部として事前に準備していた場合が殆どであったことが、学生からの報告でわかっている。内容は「おはようのうた」や「さようならのうた」といった、赤本に収録さ

れている生活指導の歌が主流である。その他に季節の歌や、園独自の礼拝や黙想の歌なども、弾く機会があった。「昼食時」で多かったのは「お弁当」\*13であった。音楽Ⅱでは生活指導の歌をいくつか習得することを目標としているが、実習への対策として引き続き強化の必要な分野であることを再認識した。

【初めての幼稚園教育実習を終えて思うこと】

アンケートの最後に、初めての実習を通して得た感想を自由記述によって記すよう、学生達に促している。4年に亘り延べ94名分の感想を読むことができた。記述文の中から最も多く目にした内容のものを、所謂最大公約数として、〈失敗・反省〉〈自己肯定〉〈観察〉〈決意〉の4つの傾向別に紹介したい。記述内容のカテゴリは括弧内に記した。

〈失敗・反省〉

- ・歌に合わせて弾くのが難しかった。(歌の伴奏)
- ・合図をうまく出せなかった。(歌の伴奏)
- ・前奏がうまく弾けず、こども達を困らせてしまった。(歌の伴奏)
- ・しっかりテンポをとる必要性を感じた。(歌の伴奏)
- ・季節の歌のレパートリーを増やすべきだった。(準備)
- ・園独自の歌を事前にたずねておくべきだった。(準備)
- ・練習不足を感じた。(準備)
- ・途中で止まってしまった。(緊張)
- ・先生方がずっと見ていたのがこわかった。(緊張)
- ・こども達の楽しそうな様子が見られなかった。(緊張)

〈自己肯定〉

- ・実習前にたくさん練習したので、不測の事態に対処できた。(準備)
- ・赤本の曲を練習した。落ち着いて弾くことができた。(準備)
- ・右手だけでも弾き続けた。(克己心)
- ・多少の間違いは気にせず弾き続けた。(克己心)
- ・こども達が歌ってくれるのが嬉しかった。(こどもの力)
- ・こども達を見ながら弾くことを意識した。(こどもの力)
- ・こども達のほめ言葉が励みになった。(こどもの力)

〈観察〉

- ・担任の先生が上手で、こどもの好きな歌を弾いていた。(ピアノ技量)
- ・こども達の様子を見ながら弾いていた。(ピアノ技量)
- ・踊りやすいように、軽やかに弾いていた。(ピアノ技量)
- ・歌詞を言いながら、歌いやすくして弾いていた。(ピアノ技量)
- ・ピアノの苦手な先生もいたが、元気よく弾いていた。(ピアノ技量)
- ・ピアノが苦手でも歌唱やリズムでサポートするすべを学んだ。(ピアノ技量)

〈決意〉

- ・次の実習のために今からがんばりたい。(ピアノ上達)
- ・レパートリーを増やしたい。(ピアノ上達)



- ・こどもの歌は暗譜で弾けるようになりたい。(ピアノ上達)
- ・他人に聴いてもらう機会を増やしたい。(ピアノ上達)
- ・落ち着いて弾けるようになりたい。(ピアノ上達)
- ・こどもの前でしっかりしなければならぬ。(態度)
- ・保育者になるという決意を強くした。(職業意識)

次に感想のなかでも秀逸と思われるものを、原文に近い形で抜粋し紹介したい。

「同じ曲でも速度や強弱を変えることでこども達が楽しんでた。工夫して弾くことも大事だと思った」

「練習の時もっと本番を意識してすることが大切だと思った」

「頂いた楽譜に左手がなかった。自分で音を探して和音をつけたらますますピアノが面白く感じられた」

「こどもたちと一緒に歌いたい、こどもたちのために弾きたい、という気持ちがあまった」

「ピアノをとおして音楽の大切さはもちろん、こどもとのかかわりや保育現場でのつながり、大切さを感じた」

「朝ピアノを弾き歌うことで、こどもたちは自然と笑顔になった」

「季節の歌を歌うことで季節に関する話題の提供ができ、歌詞に出てくる単語についてこどもたちの知識を深めたり、とても感銘をうけた」

幼児教育における音楽の役割、そしてこどもと音楽を結びつけるピアノの重要性については、音楽Ⅱの授業で何度も学生達に伝えたつもりである。しかしアンケート用紙からあふれ出てくるのは、実習を体験したものならではの生きた声なのである。こどもの歌声、こどもを輝かせる音楽の力、それらを全身で体験し受け止めたことが、ひしひしと伝わってくる。これらの言葉が、ピアノを弾き始めたばかりの初心者から発せられることに、おおいに意義がある。初期段階で「何のためにピアノを学ぶのか」という意識の方向性が定まるからである。

実習を経たのちの授業は、「次の実習ではもっと弾きたい」「ピアノをとおしてこどもたちと関わりたい」、という意欲に突き動かされて、取り組み方に変化が現れてくるのである。実習の感想を改めて読んでみて、意識が劇的に変わる瞬間に立ち会っているような臨場感を味わうことができた。

### Ⅲ. 結び

本稿は、ピアノ指導法の中でも、幼児教育を志望する学生に特化したメソッドを文章で解説することを目的とした。それは音楽大学で演奏家を目指す学生を対象としたものとはあらゆる点で異なっている。最も大切なのは音楽をとおしてこどもたちに人生の豊かさ、世界の美しさ、などを知ってもらうことなのである。その究極の目的のために、ピアノの上達を自発的に願うようになること、そのことが筆者が受講生に望んでいることと言える。技術を向上させることと共に、こどもの文化の一端を担っていく自覚と誇りを、学生達にはぐくんで欲しい。そのため研究に今後もたゆまず精進することを決意して、本稿の結びとしたい。

## 注

- \*1 入学前ピアノ講座は入学後のピアノ授業をスムーズに行うために実施している。対象はピアノ未経験者。
- \*2 筆者の住む紫原地区は、1960年以降住宅造成が急速に進んだ地域で、一大ベッドタウンとなった現在も子育て世帯が多く居住している。鹿児島市内では皇徳寺台・伊敷台の2地域と並んで比較的学力平均値が高く“荒れていない”校区に数えられており、所謂文京区として県外からの転入者に人気の高い地区でもある。1900年代後半ここには多くのピアノ教室があり、師弟にピアノレッスンを受けさせるために紫原に移り住む家庭もあったと聞いている。
- \*3 「練習の記録」の“感想・質問”欄のこと。週1回提出が義務づけられている。
- \*4 幼稚園実習は通常11月に行われる。例年「全く弾かなかった」「1年次は観察実習に徹した」という学生が数名いるが、殆どの学生は部分実習や研究保育などでピアノを弾いたと報告している。この件に関しては本稿の別項目で具体的に述べる。
- \*5 エドナ・メイ・バーナム（アメリカのピアノ指導者 2007年没）著。こどものピアノ教育に専心し多くのピアノ教則本を出版し、全米主要都市でピアノ教師の指導を行った。『バーナムピアノテクニク』は現在も世界中のこどもたちに使用されている。
- \*6 『うたとあそび』2001年度版巻頭「序にかえて」より抜粋。平成2年の発刊以来11度の改訂発行が行われている。
- \*7 正式名称は「鹿児島県私立幼稚園等教員採用候補者試験」。教員としての適性を検定することにより有能な教員を確保し、幼稚園教育の充実を図ることを目的として一般社団法人 鹿児島県私立幼稚園協会が実施している。ピアノ実技課題曲は毎年異なる。
- \*8 平成28年度鹿児島県私立幼稚園等教員採用候補者試験実施要項（平成29年度採用分）より引用。
- \*9 音楽表現練習へのピアノ小曲集 バイエル併用 小川一朗 編【1】3頁を参照。
- \*10 ブロック・コードの構成音を分解し、「ドソミソ」というパターンに作り替える伴奏の手法。殊に古典派の楽曲でよく使用される。指の動きが速くなるため、初心者には難しい。
- \*11 筆者は平成14年度から6年間、初心者から上級者まで、レベルの異なる学生の指導をしていた。
- \*12 アンケート項目6番「伝えたいこと・質問」に「知らない子とも仲良くなって4月からが楽しみです」と記述した受講生がいた。
- \*13 “おべんと おべんと うれしいな～”という歌詞で始まる歴史のある歌だが、給食の増えた現代では歌詞を“きゅうしょく きゅうしょく うれしいな～”と替えて歌っている園も多い。

## 参考文献

うたとあそび 鹿児島県私立幼稚園協会発行 平成2年10月1日初版発行

バーナムピアノテクニック 導入書

バーナムピアノテクニック1 エドナ・メイ・バーナム 大島 正泰 監修

全音楽譜出版社 1975年5月15日第1版発行

音楽表現練習へのピアノ小曲集 バイエル併用

小川 一郎 編 シンコーミュージックエンタテイメント

2011年6月16日第173版発行

バステインピアノベイシックス テクニック レベル3

ジェイムズ・バステイン 東音企画（日本語版）発行年不明

